

Afumi Vocal Ensemble VIII

あふみヴォーカルアンサンブル 第8回演奏会

天の響き 地の祈り ～伝え継ぐ心と歌～

Program

■グレゴリオ聖歌からルネサンス音楽へ歌い継ぐ歌

グレゴリオ聖歌～O quam gloriosum
サカラメンタ提要～O quam gloriosum
T.L.de Victoria / O quam gloriosum (おお何と栄光に満てる)
グレゴリオ聖歌～Sicut cervus
G.P.da.Palestrina / Sicut cervus (鹿が泉の水を求めるように)
サカラメンタ提要～Tantum ergo (大いなる秘跡を)
F.Guerrero / Pange lingua gloriosi (舌もて語らしめよ)

■日本の伝承歌～「わらべ唄・日本民謡」より 増田順平編曲

大波小波 (山形県わらべ唄)
おこんめ (滋賀県わらべ唄)
ほたるこい (滋賀県わらべ唄)
もうっこ (青森県民謡)
ずいずいずっころばし (東京わらべ唄)

■ミサ アルゼンチーナ (Missa Argentina-Homenaje al Papa Francisco) Alwin Michael Schronen (1965-)

Kyrie (憐れみの讃歌)
Gloria (栄光の讃歌)
Sanctus (感謝の讃歌)
Agnus Dei (神の子羊)

■「聖週間のためのレスポンソリウム集」より Jan Dismas Zelenka (1679-1745)

Omnes amici mei (友はすべてわれを欺き)
Velum templi scissum est (聖所の幕は裂け)
Tenebrae factae sunt (あまねく暗くなりて)
Tradiderunt me (われは不正な者の手にわたされ)
Caligaverunt oculi mei (わが眼は涙にくもりて)
〈通奏低音〉
ヴィオラ・ダ・ガンバ 上田康雄
ポジティブオルガン 吉田祐香

ー本日ご来場いただきましたお客様へー

† 本日は会場に「滋賀県がんばる医療・福祉応援寄付」の募金箱を設置しております。皆様のご協力をお願い致します。
† 全席自由としておりますが、感染症対策のため御利用できない席がございます。予めご了承下さい。
† 客席・ホール内ではマスクの着用および咳エチケットの励行をお願い致します。

2021/8/29 [Sun] Start/14:00
米原市民交流プラザ (ルッチプラザ)・ベルホール310

主催 ■ あふみヴォーカルアンサンブル

後援 ■ 彦根音楽連盟 滋賀県 滋賀県教育委員会 米原市 米原市教育委員会

ⓃⓃⓃ NHK大津放送局 朝日新聞大津総局

『グレゴリオ聖歌』は、キリスト教西方教会の典礼で使われる聖歌ですが、9世紀頃に記譜法が考案・発達するまでの何世紀にも亘って代々口承されてきました。そして『グレゴリオ聖歌』を主とした単旋律の聖歌が、中世期、ルネサンス期と経るに従い、音を重ねて和声を構成し、更にはポリフォニー音楽として発展、『ルネサンス音楽』の隆盛へとつながり、西洋音楽の礎となります。

ルネサンス期の作曲家は、『グレゴリオ聖歌』を意識しつつ、自分の作品に有形無形に投影させながら作曲したに違いありません。例えば、本日演奏するゲレーロの「舌もて語らしめよ」では、1,3,6番はグレゴリオ聖歌をそのまま単声曲として採用し、2,4,5番の四声部分では、カントゥス・フィルム（定旋律）にそのグレゴリオ聖歌を当てています。

更に、『グレゴリオ聖歌』は日本にも伝播します。ローマ教皇にも謁見した天正遣欧少年使節が、1590年の帰国の際に活版印刷機を持ち帰りました。その印刷機で1605年長崎にて印刷された『サカラメンタ提要』にグレゴリオ聖歌の楽譜が掲載されており、これが日本で最初に印刷された西洋楽譜とされています。

このステージでは、『グレゴリオ聖歌』を起点とした音楽の伝播を提示するために、同名曲を『グレゴリオ聖歌』『サカメンタ提要』『ルネサンス曲』と比較しながらお聴きいただきます。

●「おお何と栄光に満てる O quam gloriosum」・・・まずは女声より『グレゴリオ聖歌』、男声により『サカラメンタ提要』を演奏した後、混声によりビクトリア作曲の同名曲(1572年出版)を演奏します。

●「鹿が泉の水を求めるように Sicut cervus」・・・最初に『グレゴリオ聖歌』を演奏し、続いてパレストリーナ作曲の同名曲(1587年出版)を演奏します。

●「大いなる秘跡を Tantum ergo／舌もて語らしめよ Pange Lingua」・・・「舌もて語らしめよ」の一節でもある「大いなる秘跡を」を『サカラメンタ提要』に基づき演奏した後、ゲレーロ作曲の同名曲「パンジェ・リングァ」(1572年出版)を演奏します。

(長谷部健)

グレゴリオ聖歌からルネサンス音楽へ歌い継ぐ歌

Victoria/Palestrina/Guerrero

増田順平

日本の伝承歌～わらべ唄・日本民謡より～

第2ステージ編曲者の増田順平氏は、東京混声合唱団や日本合唱協会の設立メンバーで、数々の合唱編曲で知られています。氏のコーラス・アルバムの中から日本各地のわらべ唄や民謡を5曲お送りします。

●大波小波(山形)
どこからか笛の音が響き、そのふしをたくさん子どもたちの歌声が引き継いでいくような演出を試みました。地域を越え、少しずつ形を変えて伝わっている縄跳び歌です。

●おこんめ(滋賀)
このお手玉遊び歌は、(少し違う形ですが)祖母や母が歌っていた記憶があります。だんだん難易度が上がっていくお手玉と母の手の動き。娘の私もドキドキしながら一生懸命応援していました。

●ほたるこい(滋賀)
雨上がりの川沿い。浴衣に草履、団扇を手にすれば、ちょっとわくわくする夜のお散歩。ほわんと光るほたるをからかうように追う子どもたちの声が、夜空に広がります。

●もっご(青森)
日本では、子守唄は仕事の歌でした。おどかしているような言い方ですが本当は自分も泣きたい気持ちであやしていたのかも。現代の子育て世代も切実な共感が持てそうです。

●ずいずいずっころばし(東京)
最後は、多くの人に伝わるおなじみの手遊び歌です。将軍家に献上する権威あるお茶壺道中も、最後にはドンドコショと明るい笑いに。時代も地域も越えて伝え継がれるものには、そんな力強さが感じられます。

(長谷部茂子)

アルヴィン・ミヒャエル・シュローネンは1965年生まれのドイツ人作曲家で、ザール音楽大学で合唱指揮とオルガンを学んだ後、1989年から作曲活動を開始、近年日本でも演奏機会が出ている作曲家です。母国ドイツでは判りやすい音楽スタイルから若い世代の合唱団に人気があるようで、国際コンクールのプログラムにもしばしば登場します。

今回演奏する「ミサ・アルゼンチーナ」は2013年に第266代ローマ教皇に選出された教皇フランシスコをオマージュして書かれたもので、南米からの初めてローマ教皇が選出されたことを祝う作品になっており、本作はクレドを除いた所謂〈小ミサ〉の形式を取っています。

当初は神聖な合唱音楽に焦点を当てていたシュローネンですが、作風の一つとしてあげられるのが「古いものと新しいものとの融合」。本作においても、先ず基本のメロディーをアルゼンチンの古い民謡に求め、それを展開させる形式を取っていますが、これは中世ルネサンス時代に用いられた〈パロディミサ〉というものと同様です。しかしながらその和声構造は簡潔明瞭でありながらも、コダーイやバルトークが民謡を素材にして作曲した作品にみられるように、近代和声で禁則とされている〈平行五度の禁則〉を意図的に取り入れ、旋律もメロディックなものというよりは旋法的な旋律を使って古いものと新しいものの融合を図っている様に見えます。実際にはアルトパート以下の三声に完全音程の平行進行を取らせていることで、醸し出される響きが中世ルネサンスを想起させるようなものとなっていますし、またリズムの取り扱いについてもバロック以前の舞曲の形式を取り入れていることから、シュローネンがアルゼンチンの長い歴史の中で初のローマ教皇を排出した事に対して「故きを尊び、現在に繋ぐ」という思いの下で作曲したのではないかと考えるのは間違いではないと思います。

現代の合唱曲とはいえ、非常に聴きやすい音楽になっていますので、ゆったりとお聴き下さい。

(久保田一臣)

Jan Dismas Zelenka

Alwin Michael Schronen

「聖週間のためのレスポンソリウム集」より

本日最後のステージはヤン・ディスマス・ゼレンカの全27曲で構成されている〈聖週間ためのレスポンソリウム集〉から聖金曜日のための9曲のうち5曲を抜粋してお送りします。

レスポンソリウムとは「応唱」とも訳され、独唱者に応答する形で合唱が歌われる形式のことを指し、今回演奏する曲はキリストの受難をテーマにしたテキストに作曲されています。

ゼレンカはボヘミア(現在のチェコ)に生まれ、ザクセン選帝侯国のドレスデンで没した作曲家で、当時はバッハやヘンデルとともに活躍し、後の古典派のオペラに通ずるような音楽の形を提示していることもあって「ボヘミアのバッハ」とも言われていました。実際に大バッハとも面識があり、大バッハもゼレンカの才能を高く評価していたことが知られています。息子のフリーデマンにゼレンカの作品を勉強のために写譜させていたことから、ゼレンカがいかに秀でた音楽家であったかということが伺い知れます。

ゼレンカの作品は第二次世界大戦下で消失したものもあり、現在遺されている作品が戦後に再発見されるに至って、オーボエ奏者で作曲家でもあるハインツ・ホリガーの功績もあって20世紀後半に評価されることとなります。

聴いていただくとわかると思いますが、ゼレンカの作風はバッハやヘンデルと異なったものであることがわかります。大胆な不協和音の扱いや増音程・半音進行の使用などにより、かなり感情的な側面を見せています。そのことはボヘミアの出身である事と無関係ではなく、優雅とは対極にある民族音楽の動的なリズムを音楽の中に取り込んでおり、このレスポンソリウムも受難をテーマにしているにも拘わらず、その歌詞の意味とは対照的な動的旋律を与えているところが印象的です。

この曲集は国内では演奏される機会が殆ど言っていないほど無いのですが、ゼレンカの魅力的な音楽を表出できればと思います。

(久保田一臣)

■ごあいさつ■

あふみヴォーカルアンサンブル 代表 長谷部健

本日は、あふみヴォーカルアンサンブル第8回演奏会『天の響き 地の祈り～伝え継ぐ心と歌～』にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。本日の演奏会は、昨年予定されていた演奏会(2020.8.9.びわ湖ホール・小)を延期し、一部楽曲を入れ替えた上で開催致します。

この間、発声を伴う「合唱」を取り巻く環境は非常に厳しいものがあり、現在も継続しております。それに対応すべく、小人数ゆえの機動性や創意工夫で感染リスクを最小化しながら活動してまいりました。本日は「伝え継ぐ」をキーワードに、グレゴリオ聖歌が伝わる流れや、童謡・民謡など伝承民俗音楽の合唱音楽への昇華、ボヘミア生まれでウィーン、イタリアでの経験をドレスデン宮廷楽団にて開花させたゼレンカ、といった構成をお聴きいただきます。

これら多彩な楽曲の楽しさ、素晴らしさを皆様に「お伝え」できれば、と思っております。最後までどうぞお楽しみください。



上田康雄 ● Yasuo Ueda ヴィオラ・ダ・ガンバ

京都市立芸術大学作曲科専攻。在学中にチェロを始める。故黒沼俊夫、岩淵龍太郎、平井丈一郎の各氏に師事。京都市交響楽団に13年間在籍。1998年から2017年まで京都フィルハーモニー室内合奏団に在籍。90年オランダ・デンハーグ王立音楽院及びアムステルダム音楽アカデミー留学。サートイフェイケートを取得。東京バッド・モーツァルト・オーケストラ、バッド・コレギウム・ジャパンで活躍。バロックチェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、通奏低音奏者として参加。古楽アンサンブル「ザ・ガット・クラブ・バンド」主宰。鈴木秀美、J.T.リンデン、ヴィオラ・ダ・ガンバを平尾雅子の各氏に師事。室内楽をW.クイケンに師事。現在、立命館大学交響楽団弦楽部トレーナーにおの浜弦楽アンサンブル指揮者。

Basso Continuo

Basso Continuo

吉田祐香 ● Yuka Yoshida ポジティブオルガン

2007年ライブティビ音楽芸術大学古楽器科に入学。チェンバロを専攻。2013年にマスター課程(修士課程)修了。教会やコンサートホールで室内楽の伴奏者として活動し、2013年に日本へ帰国。大津市在住。チェンバロを長瀬 節子、エリック・リ・ケリー、トビアス・シャード、ニコラス・パール の各氏に師事。室内楽団 ソリステン彦根、エンゼンブレ・シュヴェルツェ、石山高校音楽科卒業生による芸術家集団ラビモン、鍵盤デュオ・ブチ クレアドメンバー。



石原祐介 ● Yusuke Ishihara アンサンブルトレーナー

京都市立芸術大学、同大学院声楽専攻を卒業、修了。卒業時には音楽学部賞を受賞。第21回飯塚新人音楽コンクール声楽部門第2位。これまでに京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師、神戸市混声合唱団コンサートマスターを歴任。また、久石譲シルヴェスターコンサートなど、様々なオーケストラ公演の合唱指揮者を務めている。

声楽を灘井誠、山口はやとの各氏に師事。指揮法を青木邦雄氏に、合唱指揮を吉村信良氏に師事。T.カリュステ氏、E.オルトナー氏、田中信昭氏、大谷研二氏による合唱指揮マスタークラスを修了。現在、日本センチュリー合唱団指揮者、日本合唱指揮者協会会員。京都バッド合唱団団員。アンサンブル・ガウディウム主宰。2022年3月20日(日)、京都府民ホールアルティにてリサイタルを開催予定。

Ensemble Trainer

Voice Trainer

矢守真弓 ● Mayumi Yamori ヴォイストレーナー

エリザベト音楽大学声楽科卒業。NHK洋楽オーディション合格。1995年イタリアにてペルカントアカデミア修了ディプロマ取得。1996年飯塚シニア音楽コンクール声楽部門第2位受賞。ソリストとして活躍するとともに、少年少女合唱団「星の子」、穂積コールシュレ、能登川コールシャント、アグネス倶楽部の合唱指揮者、混声合唱団「京都木曜会」をはじめ合唱団AUG、教習市民合唱団など各地のヴォイストレーナーを務める。声楽を木川田温子氏に、合唱指揮法を故・吉村信良氏に師事。



あふみヴォーカルアンサンブル ● Afumi Vocal Ensemble



1998年、滋賀県長浜市にて結成。「あふみ」とは「琵琶湖」を意味する「淡海(あわうみ)」が転じたもの。結成当初より一貫して指揮者を置かず各団員の音楽的感性のぶつかけ合いと融合をモットーに音楽作りをしている。タリス・スコラズ指揮者ピーター・フィリップス氏のレッスンを受け、ルネサンス時代の宗教曲や世俗曲を中心に取り組みを続ける一方で、近現代曲や日本の童謡・唱歌等時代やジャンルを越えて幅広い楽曲を取り上げている。近年は古楽器やオルガンと共演するなど活動の幅を広げると共に、各種のコンクールやコンテスト等にも参加し、第19回宝塚国際室内合唱コンクールにおいて初出場で金賞(混声合唱の部)を受賞、第29回には銅賞(ルネサンス・バロック部門)を受賞、しがヴォーカルアンサンブルコンテストにおいては6回金賞を受賞した。演奏会とクリスマスコンサートの主催、地域の行事や学校公演出演の他、滋賀県外での活動の機会も多く、アルティ声楽アンサンブルフェスティバル(京都・2007、2016年)、国民文化祭(岡山・2010年)、声楽アンサンブルコンテスト全国大会(福島・2012年)などに出場した。

【メンバー】 勝間正美 鈴木泉 中城宗子 長谷部茂子
清水芳子 藤令子 吉田祐香
久保田一臣 長谷部健